

國學院大學学術情報リポジトリ

総合討議

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古沢, 広祐, 齋藤, 平, 藤田, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001052

《総合討議》

【古沢】 今回の研究会のテーマは、「復興・伝統文化と地域の自立性」ということで、個別報告として齋藤平先生、藤田直子先生、筒井裕先生にご報告いただきました。また、滝澤克彦先生、阿部晃成先生にコメント及び関連話題をご提供いただきました。

文化については、古きものを良きものとして捉える傾向がありますが、古いものにも限界があります。これからの未来へ向けて、文化的な面で見ると、今までとは別な形の情報インフラ的な分野で文化インフラを構想していくようなことも論点としてあると思います。現在の社会では、様々な人達がそれぞれ多様な生き方をしており、地域の中に密接しているというわけではなくなり、多種多様な展開があります。また、そのような地域や地域コミュニティの在り方と個人化の中で、震災や防災などをどのように受け止めていくのかという問題があります。そして、人々の意識形成や心理的な在り方の点では、昔から災害が起こってから災害に気付く、注意するものの、時間が経過することで過去のものになってしまふということがあります。これについては、過去を忘却する人間が、それを忘れないために伝承していくための形として記念碑などに現れて



いるという話がありました。

記念碑を作製する発案等は、地域から湧き上がるものだけではなく、行政などが主導し、上から降りてくるものもあり、それらが継承される所ではどのように機能しているかということが重要になります。それとともに、記念碑等が、地域の中で活きた伝承、もしくは防災的な意識として機能している地域の例もあると思います。その場合、それが機能している場合とそうではない場合の違いなどについて、色々な形で考えていく必要があると思います。こうした論点を踏まえた上で、先生方にお話いただきたいと思っています。

災害を忘れるということ

【齋藤】私の関心の一つに、皇學館大学のあります三重県伊勢市において、今後、東海・東南海地域で地震が発生した場合、津波によって市街地は全て浸水域になるという三重県の想定図があります。それに対して、東日本大震災を教訓として、防災だけではなく、復興のことも視野に入れながら考えておかなければいけないと考えています。また「想定」ということが重要になると思います。意図的に災害を忘れようとしているのではないかと滝澤先生からのお話については、なるほどと思いました。それは、心理学で恒常性といいますが、どんな危険な場面であっても、自分だけは生き残れるんだ、と人は思うということが言われます。この恒常性が働くことで、想定内に収まるだろうと考えることが防災にとっては非常に危険である、と群馬大の片田先生（現・東京大学）がおっしゃっています。

また、本来は、震災前の地区に早く戻して欲しいと思っていった人が、復興の遅れにより戻れなくなってしまうようなことを防ぐには、事前に地域のコミュニティが想定して対策を立てるべきだと思います。しかしながら、今のところ、そこまで議論はされていません。

今後、私は静岡県から高知県までの区間で、過去の災害に対して、こういう復興の仕方をしたというような伝承を自然災害史の中で調査していきたいと考えています。こうした言い伝えが、今後、起こりうるであろう災害時にどのような対応をすればいいのか、という議論の醸成につながるのではないかと思います。

【藤田】「なぜ、頻繁に地震は起こるのに、起こらないだろうと人は思ってしまうのか」という言葉がありました、真にそのとおりだなと思いました。特に九州ではその傾向が顕著だと思います。九州では毎年梅雨の時期の大雨や秋の台風が発生するように、一年間のサイクルの中で大きな被害をもたらす自然災害が一つか二つは確実に起こっています。加えて、火山の噴火があります。そのような身近な自然災害がルーティーンとして発生し、確実に起こる中で、皆どうにかやりくりしながら生きています。この日常の自然災害に対して、何百年に一回単位で起こる地震は、自分のこととして考えにくいように思います。

地震直後に、自治体や自治会に調査をした時でさえ関心を持っている自然災害は、地震よりも洪水という回答が多く聞かれました。「地震は一回起こったからもう起こらないだろう」ということであり、自分のこととして考えにくいという思考になっていると思いました。

【筒井】地震を経験した人々が、「もう、地震は起こらないだろう」と考えてしまうというお話がありました。こちらには噴火になりますが、昭和期以降、三宅島では二十年に一度の頻度で大規模な噴火が発生しています。島の高齢者の中には三〜四回の噴火を経験した方もおられます。このような自然災害の常襲地帯の子供たちは、被災のたびに親が家を建て直す姿を見て育つので、彼らが自分の家を持ち、被災した時には、「自身も親と同様に家を建て直そう」という気持ちになるのだそうです。一生を通して二回、三回……と大規模な自然災害を経験する地域では、災害の伝承は比較的容易だと思いますが、このようなケースは稀でしょう。しかし、自然災害が頻発する日本に住む私たちは、

このような地域を「重要な事例」と認識し、研究を進めていく必要があります。

三宅島にも、噴火を契機に島外に移住した方がおられます。このような方々は「島に住み続けたいが、二十年に一度の噴火が怖い」という思いから、島に心を残しながら離れていきます。そのような人々が移住した本土のある地域に三宅島の祭礼文化が持ち込まれ、これが原因となつて、一時、彼らと島の方々との間に摩擦が生じたと聞きます。今後は、自然災害をきっかけに他地域に移住した人々、そして、彼らが持ち運んだ地域文化についても調査を重ねる必要があると私は感じています。

地域を知り、選択する

【藤田】グリーンインフラという考え方を知らずに防災を考えなければならぬ場合は、何か構造物を造ることが当たり前になってしまいます。そのような状況の中で、「そうではない防災減災アプローチもありますよ」というアイディアを提示することで、当事者の皆さんが考えてみるという気付きそのものが大切だと思います。そのプロセスの中で、自分たちの生きる地域のことをもう一度知ろうとしてみたり、勉強したり、あるいは決断したりすることが大事になると思います。例えば、コンクリート系の人工物で防災しようとするのか、元々地域にある地形を利用して減災しようとするのか、ということは、自分たちの地域を知り、考え、勉強することで、防災・減災の効果を踏まえて、自分たちで決断することができるようになります。また、グリーンインフラの有用性として、経済面では人工構造物を造った時の短期的な費用やメンテナンスに掛かる費用に比べて安価で済むという利点があります。自然災害対策が自治体の財政を圧迫する可能性を考えなければなりません。仮に常に国からお金を交付されて防災・減災し続ける事が出来る地域があるとすれば構造物を造って防災していけば良いかもしれませんが、そうではない自治体では、自分たちの

少ないお金の中でどういう選択をしていくのか考えなければいけません。グリーンインフラを知ることとは、それを考えるきっかけになると思います。グリーンインフラを行うには、地形の分析が非常に重要であり、自然の力だけに頼って、出来るものではありません。そういう実情を踏まえながら、勉強して、知って、決断するというプロセスを人任せにするのではなく、地域の人々も一緒になって考えるということが大事になってくると考えております。

復興・地域の在り方

【古沢】 伝統文化が結びつきではなく、断絶を引き起こしてしまふ。あるいは阿部さんの発言にもありましたが、良かれと思う復興へのお膳立てが、逆に悪い方向へと働いてしまうということは、重要な論点だと思えます。今、現場ではそういうことがあると思います。もしかすると、伝承の中にもそのような矛盾を踏まえたような受け止め方もあるのかもしれませんが。

地域復興について、従来の限定的な地域を見るだけではない復興の在り方、あるいは多様な地域の在り方ということが重要な論点として出てきました。地域、在り方、復興というキーワードを論点として、補足いただければと思います。

【阿部】 平成二十三（二〇一一）年十二月に私が仮設住宅を回っていた時、現地再建で自分の生活再建プランを考えていた方々は大勢いらっしゃいました。それが、復興計画では、高台オンリーで、下の方は全部ダメとなっていました。つまり、高台移転に参加しない人は出ていくってくださいますというものでした。それで、私は住民活動を始めました。住民活動をする中で、テレビなどにも取り上げられましたが、それに対しての反応は、非常に感情的で、いかに私の発言が荒唐無稽で愚かしいことであるかを言ってくる方々が大勢いらっしゃいました。この行動は、明らかに善意に

基づいて行われていると思います。このようなことをされることで、現地再建を考えていた人たちも考えが変わり、地域を離れざるを得なくなるという流れになりました。このように地域から離れた人たちは、地域の復興からは基本的にいない人として扱われます。

私のように、復興事業の意思決定プロセスや二度と被害を受けない地域を目標とする防潮堤の高さ自体が間違いであるという意見は、報道されません。

「早い復興」という言葉の中には、一回立ち止まって、考え直そうということが全く認められませんでした。藤田先生のお話の中で、住民たちが自分たちのことを納得した形で決める過程が大事とおっしゃいましたが、早い復興を行うには、早い意思決定をする必要があるため、その過程が存在しなかったのです。私は住民がどのような形を選んだとしても、住民が積み重ねて、納得した内容であれば、絶対に生きるはずだと考えております。

避難状況下の芸能・祭り

【黒崎】 國學院大學の黒崎です。福島県の浜通り地域の方は、今でも多くの方が避難している状況の中で、特に祭りや芸能が避難先で再開し、あるいは避難先だけではなく、全国で芸能を披露する機会を持つことで、避難している人たちの心の支えとする活動がされていますが、実際は難しい局面に入っています。平成二十九（二〇一七）年三月末から四月初めにかけて、富岡町、浪江町の避難指示解除準備区域と居住制限区域は避難指示が解除され、帰還困難区域には人がまだ住めない状況ですが、帰還できるようになりました。でも実際に帰還している人は、元の人口の二割か三割ぐらいです。戻らないという人が半数ぐらいいるという状況です。そのような状況で、芸能、祭りが、これから先どうなっていくのか。つまり、戻っていく人たちのための芸能、祭りになるのか。もしくは、今でも避難してい

る人たちにとって意味のある芸能、祭りとして、これからも継承していくのか。そういう曲がり角に立っているところがあります。今後の見通しがつかないところがありますが、今後、伝統文化の役割というのを、今、考えていかなければいけないのではないかと思います。

ランドスケープ・タイムスパンについて

【黒崎】 ランドスケープデザインに関係して、私も平成二十八（二〇一六）年六月頃に南阿蘇村に行きました。南阿蘇村には、いろんな所に湧水がありまして、その中の一つに塩井社という神社がありました。神社は倒壊しており、後背地も土砂崩れしそうな被害を受けました。また、地層がズレたことで水源が断たれてしまっており、また、地元の方は、社殿の再建、地域で盛んである神楽は自分たちで出来るが、水源を元に戻すことは出来ないし、水源は田んぼへの水供給地であるために自分たちの農業も復興できない、と伺いました。水は他のところから引張ってくることも出来るが、それでは地域の自立した農業ではなくなってしまうということで、非常に悩んでおりました。とにかく、ボーリングをして、水を湧くようにしてもらうことが、自分たちにとって一番求めていることであり、大事なことだとおっしゃっていました。

被災から復興までの地域の伝統文化の役割を考えた場合に、どれくらいの期間を想定しているのか、ということが重要だと思っています。それは、地域か個人かに繋がる話ですが、個人であれば七十、八十年位しか生きられないわけですが、その間に元の場所に戻ることが出来なければ、それで終わりになると思います。例えば、東日本大震災が発生して七年が経ち、命を落としている方がたくさんいらっしゃいます。一方、新しい命も生まれているといった時間の流れの中で人生のタイムスパンがあります。他方、芸能や祭りのような伝統文化、石碑というような人生よりも長い

タイムスパンのものがるように思います。

ランドマークとか石碑というものは比較的長いスパンのものとして考えられていると思いますし、祭りは長く続いていくようにイメージされていると思いますが、筒井先生がご指摘されていますように、二世代、三世代前に頑張った人たちがいて、その人の頑張りを次の世代に受け継いでいる部分があり、長く遡れるものではないものもあります。あるいは何かのきっかけで消滅の危機にあったものが、もう一回復活して、今に至っているというのがあったりします。かなり違ったタイムスパンが伝統文化という中に一括りにされている印象を受けました。

【藤田】 南阿蘇村の塩井社の水源が枯れたという話題を出していただき、ありがとうございます。塩井社は、社殿が崩れ落ち、鳥居も粉々に壊れました。先程、神楽のお話もありましたが、この神社には相撲の土俵があり、水源もあるというところで、地域の人たちにとっては拠り所でありました。また、阿蘇を訪れる観光客にとっても訪問先の一つでした。地震後に水源が枯れたのは、熊本市内では水前寺公園でした。ここでは一度水が無くなりましたが、しばらく経つと水が戻ってきました。一方塩井社では、未だに水は戻っていません(※)。阿蘇では逆に水が増えたという場所もあり、地下でどのような変化が起きているのか、水の状況一つ見ても大きな違いが出ているなど実感しております。平成二十八(二〇一六)年の調査では田畑の水が喫緊の課題であると明らかにされたということでしたが、私が現地でヒアリングをした時は、「とりあえず隣から水を借りてきて、生業を復興させるのが最初だから」ということを伺いました。今、水が戻ってきていないので、おそらく隣地区から借りてきて繋いでいるのだと思います。ただ、この点につきましては、私が見ているタイムスパンは、ランドスケープで見えておりますが、そこで生活している方々にとっては、今日、明日、半年、一年の生活ということが重要な課題ですので、そういう中で田畑の水がどうなっているのか、あるいはこれからどうしていったら良いのか、という視点が非常に重要だと思いました。現地に

おいてきちんと追跡調査をやっていきなさいと思います。ヒントをいただいたような気がしております。

※塩井社では平成三十（二〇一八）年七月に水が戻り始めた。

【滝澤】私は、モンゴル研究をする前に日本の山村で調査をしていました。その時に、村落空間論というテーマを扱っていました。民俗学では、村落空間論というのが一九七〇年代、一九八〇年代に流行しましたが、一気にブームが過ぎ去りました。なぜ民俗学は村落空間論を現在まで続けてこなかったのか。あまりにも無批判に放棄された感もぬくえません。もちろん、その枠組みに多くの問題点もあったのですが、それをきちんと批判的に検証した上で、継続的に積み重ねていけば、震災に対する民俗学の対応も違っていたのではないかと感じています。

村落空間論では、空間構成や空間認識については、民俗学、文化人類学、人文地理学など、多様な研究領域の方面から事例揭示され、解釈されていきました。

村落の空間というのは、個人の認識のレベルを超えた社会的な集合表象を読み解くときの一つの基盤になります。それゆえ、ある程度長いスパンで自然環境を想定し、そのなかにおける人びとの暮らしを分析するのですが、そこには芸能、祭りも含まれてくるのです。

一方、災害を村落空間論の中に位置付けて考えてみた時に、藤田先生がおっしゃられたルーティーンとしての災害も、ある程度、そのような自然環境の中に含まれています。一方で、人生の長さと比較してある程度長いスパンで起きるような災害については、日常を超えたところから到来し、日常を掻き乱し、元に戻れなくしてしまうようなものであると捉えられます。そのような災害が起きた時に、自然環境とその中に描き出される村落空間―つまり可視的な部分だけではなく不可視的なものをも背後に含めた上での「景観」をどのように造り直し、どのように維持し、あるいはそこにどのように関わっていくのか。実は、村落空間論が批判的に検討され、動態論として練り直されていた

ならば、そのような問題を捉える一つの有効な枠組みとなっていたのではないかと思います。

もう一つ、景観の中に加えなければいけないのは、グローバルゼーション、産業化といった現代における質的な社会の変化の問題です。水源のお話でいうと、もともと近代以前の社会における村落空間であれば、水が出なくなれば、最終的には他の場所に移住する選択肢をとらざるをえなくなると思います。しかし、現在ではあらゆる技術を用いて、そのような移動を回避できる可能性も高いでしょう。つまり、環境に適応するよりも先に、環境を変えてしまうことができるわけです。そのような状況の中で、私たちの日常、習慣、制度というものを一場合によっては、環境に抵抗しながら—どのように作っていくのかという話になりますので、もはや状況は近代以前とはまったく違います。そこでは、より多くの可能性と選択肢のなかから、私たちは判断を迫られることになります。さらにその判断の責任という問題については、主体的な判断が可能になればなるほど、その責任はその主体（個人）へと担わされていくという状況が生じてきます。そういう意味で、阿部さんがおっしゃられた、住民主体に寄り添って判断するということは、非常に重要ですが、それは住民の選択の責任を住民に押し付けるということになりかねないという点にも配慮しなければなりません。

そもそも何が良いか悪いかということを判断するのは非常に難しい問題です。その判断の結果に対する評価にもまさにタイムスパンが関わってくるのです。例えば、ある判断が十年というスパンで良い結果をもたらしたとしても、それが二十年というスパンで見たとときも良い結果をもたらしているとは限らないわけです。そうすると、スパンを区切ったある目標を設定した上で、その到達点へいたる選択肢を評価するしかないわけですが、その目標設定自体の良し悪しは、もはやその評価の埒外の話になってくるわけです。

【古沢】 地域をどのレベルまで捉えるのか、住民、コミュニティの力、主体をどのように位置付け、考えるのかとい

う論点があるかと思っています。

碑の役割

【齋藤】阿部さんの地元である雄勝町にも碑があったと思いますが、なぜ、その場所に碑が建っているのかという話は聞かれたことはありませんか。

【阿部】私の母親の実家のすぐ近くにあり、今でもたぶん残っていると思います。雄勝町内には、たくさんあります。船戸地区では、昭和三陸地震津波以前は海辺に家が建っていて、津波によって流されたために、高台に移転したと聞きました。その時に碑が建てられた理由について、「ここまで津波が来ましたよ」と説明されており、一応、伝承としては生きていました。しかし、今回の震災の経験から言いますと、船戸地区では多くの人が亡くなっています。なぜかと言いますと、高台移転した場所に津波が到達し、地域の人は二重避難をしなかったためです。

碑が建てられた所は安全だと思っていたために被害が起きました。

【増山】國學院大學神道文化学部三年の増山です。被災地の女川町、南三陸町で倒れている碑を見た時に、なぜ伝承されなかったのかと思いました。全体的に見て、定量的にこれを捉えるのは難しいと思いますが、こうした碑を建てられたことで、今回の被害が食い止められたものなのか、それとも全く意味がなかったものなのか。逆に、ここまでは安全だと思ってしまうような逆効果の場合もあると思いますが、全体を俯瞰してご意見をお願いします。

【齋藤】印象ではありませんが、岩手県の場合は、昭和三陸地震津波の方が高かったのですが、碑を無視して、碑より海側に家を建てている例があります。宮古市田老には万里の長城と呼ばれるX型の防潮堤が整備されており、安心して碑よりも海側に家を建てたら大きな被害がありました。結局、津波の到達点は碑とほぼ同じでした。そのため、

碑より山側へ住宅地を広げれば助かったかなということです。他方、宮城県の場合は、全くこの碑は機能していなかったという印象を持っています。

【増山】 碑と同時にソフトの面、両方をセットに考えないと意味がないということです。

木碑と伝承

【佐野】 國學院大學大学院特別研究生の佐野と申します。齋藤先生にお尋ねいたします。先程、碑が木製で作られるというアイデアがありました。今は、危機感があると思いますので、震災を経験して生きている人たちは続けていけると思いますが、それを続けていくには、核となるものが必要なのかなと思います。先程も、五十年ごとに碑を作って、法要されるという事例がありました。そういう宗教的なこと、あるいは祭礼、伝統文化で伝承されていくものは比較的スムーズではないかもしれませんが、繋いでいくことが可能かなと思いますが、そういう核というものがないと、木製というのが、どれだけ繋がっていくのかなと思いました。こうした点については、どのようにお考えでしょうか。

【齋藤】 おっしゃる通りだと思います。昭和三陸地震津波記念碑の事例を見ても、碑がどういう意味を持っているのかということが伝えられなければいけません。そのため、碑を動かしたから、良い悪いという話ではありません。大袈裟に言えば、その碑が建っている場所から低い場所には家を建ててはいけないという環境変化をさせたわけです。

今回の木製の碑も、震災を伝えたいという気持ちがあり、その気持ちをどういう形にすれば一番気持ちが伝わるのか、ということからスタートしていると思います。ただ、その気持ちを実際の被災者にしか分からなかったり、実感として得られなかったりすると伝わらない恐れは非常にあります。そうならないためにも関連付けた行事

をしていくとか、あるいは先程御紹介しました外所大地震追悼供養碑のように五十年に一回法要を営むという約束事をしておく必要があると思います。それは、社会の側として受け止めておくということしかないと思います。

高台移転も記念碑と同じことで、高台に住居を移すことで町が無くなったという話になってしまいます。そうすると、やはり、人がいないと元も子もない話であり、命あつてのものであり、人がいてこそ町だということになると思います。

個の自立と共同体の自立

【増山】 地域の中で主体という話になったときに、第一には「人と人」だと思います。地域の人と地域から出た人の間にはコンフリクトが生じているというお話がありました。他方、人と自然との間には、ルーティーンの災害があります。その中で、人と自然との関係は共存していかなくてはいけないと思います。それを時間軸で考えた時に、今と昔を石碑が繋ぐように、今と昔の共存関係も考えられると思います。

今後、人と自然が共存していく際に、被災地復興は綺麗事だけでは済まない部分もあると思いますが、自立と共存という二つの言葉を比べた時に何か導き出せるものがあるのかなと思いました。また、「自立」という言葉ですが、個の自立と共同体の自立があると思います。筒井先生から御報告がありましたように、伝統芸能によって、力が復興して、共同体が自立していくというのは確かにあると思います。一方で、高台移転の話でありましたが、一割しか戻ってこない場合には、共同体の自立ではないということになるかと思っています。その時に、個の自立、共同体の自立のジレンマっていうのは、なかなかマッチできないのかなと思います。これらに対して、いかがでしょうか。

【筒井】 個々人の幸福の追求を妨げることなく、被災地を震災前の状態に戻す、ということが地域復興の最大の課題

になると考えています。正直なところ、私にはその答えがまだ見いだせていません。これを実現させる方法を模索するのが、古沢先生がおつくりになった学問分野「共存学」だと私は捉えております。

このような学際的な研究の場が与えられておりますので、皆さんのお力をいただいてフィールドワークを重ねながら、長期的な視野で究明できれば、と思っております。

【古沢】 自立それ自体をどのように考えるかということもありますし、共存というのは、色々な可能性を見ようという側面を強調した言葉という気もします。

個と共同体は、近代化の中で、ある種二項対立的な所もありますが、相互に上手く共鳴し合うような可能性もあるかもしれないという論点があります。例えば、地域の中で、地域が持っている多様な関係性である文化資本や社会資本をどのように活かしていくかということです。結束型の地域の中では、結集性の自立性という側面に他の要素が加わることで、新たに一皮剥けていくような形のより緩い繋がりである橋渡し型のネットワークがコラボレーションすることがあります。

被災地の伝統文化や芸能を再開するためには、地域の結束が核になるとともに、外からの直接的・間接的な支援といった外との繋がりもありました。また地域の持っている伝統文化がより広い世界に活用されることで、別な価値にも光が当たっていくことになりました。今までは、地域のローカルなもので留まっていたものが、ローカルなものの中にグローバルな新しい光が見えてくるような展開もあると思われます。個と共同体が対立する局面で、葛藤だけではなく、もう一つ別な要素が加わることで、何か別の道もありえるのではないかと考えますと、色々な可能性があると思います。

【高久】 共存学の高久と申します。私の研究テーマは民俗芸能です。その中で特に、パーソナル、個の問題を取り上

げて研究しています。民俗学の中では共同体、集団での伝承を中心に議論されていましたが、私は集団での伝承でもある個人が大きな影響を与えていたと考えています。私は、このような個人を「伝承キーパーソン」という言葉で示しています。

例えば、本日の登壇者の方々は、何かしら地域に影響を与えている伝承キーパーソンだと思っています。伝承に何かしら影響を与えている個人だからです。伝承キーパーソンが地域にどのような影響を与えていて、どのような関係性を築き上げていくのかという点が私の研究の柱になる部分ですが、これは共存と繋がっていくと思います。

また、ウチとソトの間にいる人は、外側を見るだけでなく、内側も見えるために、両方から叩かれるという状況にも置かれると思います。そのような人達が一番難儀していると思いますが地域の復興、地域文化の伝承には重要な存在だと思っています。

【ヴィジュアルフォークロア】映像民俗学をベースにした映像を作成しています、ヴィジュアルフォークロアと申します。震災の翌年には、雄勝の立浜地区で雄勝法印神楽復活の現場を撮らせていただく機会に恵まれました。津波で全てが流されて、何も無くなり、御自身も仮設の住宅に入っている中でさえ、子供の頃から神楽に魅せられ、神楽なしでは自分の暮らしは無いというぐらいに、神楽に入れ込んでいる神楽衆の人達が、その土地に残りました。その人達は、最初に神楽をやり、元氣を出すということで、神楽を行いました。漁師の方々は、海に全部持っていかれたが、海を全然恨んでいないし、ここの土地に住んでいる以上、覚悟して皆生きてきた。自分たちには腕があり、また海が恵んでくれるから、この土地で生きていく、ということでした。

神楽復活の際には、神楽に関連する物は流出していたので、なけなしの道具を集めてきました。それに追加で寄付してもらった物を利用し、付け焼き刃で作製しました。被災して離れていった人には、可能な限り祭りに手伝いに来

て欲しいと、ボランティアの人たちにも神輿を担いで欲しいと声を掛け、さまざまな協力を得ながら祭りが復活していく過程を現場で撮影することができました。その時、その土地を愛して、その土地で生きていく覚悟があり、被災しても再び海からの恵みによってこの土地で生活していく、ということを神楽で表現できる人達を撮影できることを幸せに思いました。

民俗芸能の底力というのを撮影する側でも感じ取ることができ、また海・山があつての日本人の暮らしなんだ、ということが神楽で表現されていることを感じることができました。

今後の研究について

【古沢】会場からの御意見、ありがとうございました。それでは最後に、今後の御自身あるいは研究プロジェクトにおいて、課題として取り組むべきもの、展望、コメント等をお願いできればと思います。

【阿部】私は、地域では一番若い世代なので、地域を見届けていくような形になると思います。震災を契機にして、戻ってくる人も、出ていった人も、震災によって地域が変わってしまったと思うのではなく、震災があつたけれど落ち着く所に落ち着いた、と思えるようにしていきたいと考えています。

【滝澤】私は、まさに村落の中でも特別な地位にある個人が村落の空間秩序の再生産にどう関わっていくのかという観点から、村落空間について論じたことがあります（滝澤克彦「ある山村に見る祭祀空間の構造―民族的「世界観」についての一考察」『東北文化研究室紀要』第四十三集、二〇〇二年。同「村落空間論再考―『民俗』を可能にするもの」『東北民俗』第四十四輯、二〇一〇年）。そのような要因を取り込んでいくことで、村落空間論をより動態的な枠組みとして練り直せるのではないかと思つたからです。もし、そのような方向性に空間論が発展できていたならば、今で

も生き残っていたのではないのでしょうか。

私のもう一つの研究対象であるモンゴルのことをお話すれば、彼らの個人と地域との関わりは、日本社会とは随分違っている印象を受けます。遊牧文化に由来するものなのか、彼らは、非常に個人主義的です。遊牧について言えば、草が無くなったり、近隣の住民と不仲になったりした場合、比較的容易に別の場所に移動することができます。あくまでも比較論的な話ですが、そういう視点で見ると、日本の社会は、地域社会とその空間に対する結び付きが非常に強いと思います。そのような結び付きこそ、まさに「絆」と呼んで良いかもしれません。本来、「絆」という言葉は断ち切りたくても断ち切れない関係性のことを意味します。そのような意味での絆は、地域社会の住民を——しばしば個人の意思を越えたところから——強力に結びつけていく原理であると同時に、地域から一度出ていってしまった人間をまったくの「他人」にしてしまえるぐらいの逆方向への力も持っています。その力は個人を越えた強さをもつからこそ、復興に寄与するものとなるのですが、一方で、それがアンビバレントなものであるということを見過ぎしてはなりません。このような注意深さは、地域社会の趨勢の本流に乗ることが出来ず隙間から零れ落ちていくような存在をすくい上げていくような配慮にもつながっていくのではないかと思っています。このような観点はまた、私の研究のスタンスにも関わっていて、おそらく私は震災研究という意味では、異色な存在だと思いますので、あまり人が触れていない所に触れていくようにしたいと考えています。

【筒井】各地域の神楽や獅子舞は、「体育会系的な組織」の中で後継者に教えられます。今回、報告させていただいたように、このような組織の中に身を置いて祭礼文化を学ぶことで、漁村の人々は屈強な身体や精神を培ってきました。私は、この仕組みが地域を元気にし、存続させる原動力の一つになり得ると考えています。

神楽や獅子舞の指導者が地域の人々をどのように厳しく指導していたかという点については、あまり研究が蓄積さ

れていないように感じます。今後はいくつかの被災地に注目して、神楽・獅子舞の指導内容や組織について比較を行い、地域のリーダー、すなわち、地域復興を担い得る人材がどのように育成されているか、解明を試みたいと思っています。

【藤田】私は景観生態学が専門です。一般的な生態学では生態系から人間を排除して生態系を考えますが、景観生態学では人間も生態系の中の一つに入れて考えます。そのため、人間も生態系の生物の中の一つの位置付けとして考えます。

生態学の用語の中には「攪乱」があり、自然現象の中で攪乱が起こります。例えば、森林の中で木が一本倒れると、太陽の光が入っていなかった所に光が差し込むことによって、それまで生育出来なかったような植物が生えて、小さな昆虫や微生物が集まり、新たな生態系が出来て、そこから発展しながら森が循環し続けていくようなことがあります。また山火事はある一定の条件が揃うと、人間が火を点けなくても自然発生的に起こります。その時に木が焼かれたり、枯れたりし、さらには虫や微生物も一旦焼かれ、結果的に山の健康が維持されます。そのようなことが生態系の中では起こっており、自然災害で人間が被害を受けるということも、ある意味では生態系の営み、地球上の営みとしては、あつてしかるべきだという風に捉える見方というのもあります。そのような中で、災害が頻発する所は、その地から避難するので住む生物の数は減りますが、砂漠、高山地域あるいは深海の海底でも適応しながら生きている生物は必ずあります。そのような厳しい環境下では、多くの生物は撤退していきますが、そのようなところでも生きていく選択をした生物が適応しながら生きていくということは、まさに人間の営み、選択、生き方にも繋がると思います。私はそういう生物学的な生態系の営みの中から、震災や自然災害に対する人の反応というものを捉える観点も注目しています。

もう一つ、私は都市計画やまちづくりにも関わっています。皆さんは、人口減少や高齢化が起る中で、コンパクトシティにしていくべきだという話を聞かれたことがあると思います。言葉としてはもう一つ、スマートシユリンクという、日本語では縮退と言います。スマートシユリンクには、賢い撤退、戦略的に撤退していく、という意味があります。今後、都市計画やまちづくりの側面からどのように自然災害と社会問題を捉えていくのかという部分も自分の中の課題として考えていきたいと思っています。

【齋藤】私は記念碑を地域の人がどのように捉えてきたのかということに関心があり、碑で伝えたいことが伝わらないということが、どういうことであり、その機能はどのようなものかを検討したいと思い取り組んできました。

記憶によって命を守るということは、一人ひとりの自立した意識に基づいていかなければいけないと思います。

日本全国で色々な形の災害に遭う可能性がある中で、災害時に対応できる自立した防災意識を持った人がどのように出来上がっていくのか、また防災意識を持った人達が集まることで、意識が高まっていくためにはどうすればいいのか。さらに防災意識に対して果たす言葉の役割について、災害史の中で言葉の使われ方から探していきたいと考えています。そして、災害が起こった時にどのように対応すればいいのか、ということの意識がこれまでどのように醸成されてきたのかということを探っていききたいと思っています。

【古沢】先生方、ありがとうございます。報告者、コメンテーターとして発言いただいた先生方、会場の皆様方にも本日は重要な論点を出していただきました。まだまだ課題はありますが、ぜひ、今回のセッションを踏まえていただいて、今後とも色々な形で繋がっていききたいと思いますので、宜しくお願い致します。それでは、これにて公開研究会を終了させていただきます。ありがとうございました。